

ソーシャルスキルとバレーボールスキル能力

の相関関係についての研究

—DATE VOLLEY によるバレーボールスキル評価技術を用いて—

スポーツコミュニケーションゼミナール 1313070 渡邊 拓人

1. 研究動機・研究目的

わが国ではスポーツが社会性スキルに与える影響について多くの研究がされてきた。しかし社会性スキルがスポーツに及ぼす影響については言及こそされど具体的な研究はあまり存在していない。

しかしチームスポーツの現場では指導者が「チーム力」、「コミュニケーション」、「協力」などの社会性スキルに直結する言葉を用いて指導する場面が少なくない。また、奉仕活動等の人間性教育を部活動などで行わせチーム内の関係を築こうとする場合も多々見受けられる。これは指導者自身や周囲の経験によるものと予測されるが現段階でそこに論理的証拠は存在しない。そこで社会性スキルが実際にスポーツの能力に如何に影響を及ぼし、そこに如何ほどの意味、効果が存在するかを追求する必要があると考えられる。

そこで、本研究ではバレーボールに於ける社会性スキル（ソーシャルスキル）の高さと各スキルの上手さ（スキル能力値）、チームスキルの上手さ（スキル能力値）、チーム内役職、ポジション、学年、経験年数に注目した。本研究の目的は社会性スキル（ソーシャルスキル）の高さが各個人のスキルまたはチーム成績に対してどのような作用を及ぼすか、またチーム内やプレー内の役割が個人の社会性スキル（ソーシャルスキル）の高さに影響しているかを明らかにすることである。加えて、社会性スキルによるチーム強化やチーム活動による個人の社会性スキル（ソーシャルスキル）の向上のための基礎資料を提供することである。

2. 研究方法

関東バレーボール男子一部リーグにおいて行われた 2016 年秋季リーグに出場した 12 チームのうち、同チームに所属した 1, 2, 3, 4 年生のうち回答のあった計 303 名に対し社会的スキル尺度 KiSS-18(Kikuchi' s Social Skill Scale : 18 Items)のアンケート調査を行い、臨床心理学者の Goldstein ら(1980)の「若者のための社会的スキル」というリストの 6 領域を下位尺度として利用し因子として分析、その得点を(1)「ポジションによるグループ」、(2)「役職によるグループ」、(3)「学年によるグループ」、(4)「リーグ順位によるグループ」に分け、グループ別にそれぞれ比較・分析する。また 28 年度春季関東大学バレーボール 1 部リーグの全試合（134 試合）を専用分析ソフト「DATE VOLLEY」を用いてデータ収集・スキル別に分析し、各スキルの数値と社会的スキル尺度の結果との相関関係の有無を調べる。

3. 主な結果と考察

下位尺度について、〈初歩的なスキル〉(2.67) が最も高く、次いで〈攻撃に代わるスキル〉

(2.66)、〈ストレスを処理するスキル〉(2.63)であった。また〈計画のスキル〉(2.39)が最も低く、〈次いでより高度なスキル〉(2.47)、〈感情処理のスキル〉(2.62)であった。〈初歩的なスキル〉が最も高くなったのは設定されている項目が優しく、特に初対面で発揮される項目がほとんどであり、対象の関東一部リーグ所属の選手は多くが体育会系の学部所属であるため初対面でのコミュニケーション行動に慣れているためであるためだと考えられる。〈計画のスキル〉が最も低くなったのは対象にした関東一部リーグの選手の多くはスポーツ推薦による入学が多く、入学試験を受けた経験がない者が多いので、したがって入学試験に対する試験勉強の経験もなく勉強などの計画などに対して不慣れな者が多いためであると考えられる。

また各スキルとの相関は個人ではレセプションとディグで弱い負の相関が、チームではレセプションとディグで正の相関が見られた。レシーブのスキルで個人とチームで逆の相関が見られた。これは個人としては周囲に気を取られず自ら判断を下し行う方が良いが、しかし個人の判断で動いたレシーバー1人がボールの回転や空気抵抗で変化する範囲すべてをカバーするのは不可能であり、その動いたレシーバーの動けない範囲を察してカバーする周囲のレシーバーのソーシャルスキルが重要となってくるためこのような結果になったと考えられる。確かに周りのレシーバーの出方を伺いながら動くとお互いに譲り合ってボールを落としてしまう、いわゆる「お見合い」と言われる現象は多くなる傾向にあるように思われ、上手いリベロプレーヤーなどはサーブを打たれた瞬間に周囲など気にしていないように瞬間的に動き出す選手多いように思われる。

4. 結論

関東バレーボール男子一部リーグにおいて行われた2016年秋季リーグに出場した12チームに所属する学生は〈初歩的なスキル〉が最も高く〈計画のスキル〉が最も低かった。

また各スキルとの相関は個人ではレセプションとディグで弱い負の相関が、チームではレセプションとディグで正の相関が見られた。これは個人としては周囲に気を取られず自ら判断を下し行う方が良いが、個人の判断で動いたレシーバー1人が9m×9mの18㎡を守るというのは不可能であり、その動いたレシーバーの動けない範囲を察してカバーする周囲のレシーバーのソーシャルスキルが重要となってくるためであると考えられる。つまりレシーブは得意な選手のリーダーシップとその他の選手のフォロワーシップの両方が必要ということである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆を終えてやはりバレーボールにはソーシャルスキルが必要ということが明らかになったと言える。しかし現状行われている「チーム力」、「コミュニケーション」、「協力」などの社会性スキルに直結する言葉を用いた指導や奉仕活動等の人間性教育を部活動などで行わせチーム内の関係を築こうとする指導はあくまで第一段階であり、その身についたスキルをどのような場面では利用し、またどのような場面では協調性を捨て自らの判断を優先させるか、チーム内での立場ごとの立ち振る舞い方など次の段階の指導を確立させていくことが今後の課題になるだろう。